平成２１年度学生支援プロジェクト事業成果報告書

国際交流への The First Step

～その一歩を踏み出そう～

代表者　　鈴井　泉　（医学部医学科４年）

１．目的と概要

このプロジェクト事業は、学祭においてブースを設け、世界の文化を知る楽しさを地域のひとたちや学生たちに味わってもらうこと、また全学含めた留学生同士、海外から日本への留学生同士、互いの経験を共有し、それをまた他の学生や地域に還元していく、多くの人々に交流を通して相互に見聞を広めていくことを目標にさまざまな活動を行った。

２．実施期間（実施日）

2009 年 7 月 11 日　から　2009 年 3 月 31 日まで

３．成果の内容及びその分析・評価等

１）医学部祭（2009 年 10 月 9、10、11 日）での展示および企画。

①ポスター展示

・ブルネイ夏季留学プログラム
・ブルネイ冬季留学プログラム
・イギリス留学プログラム
・タイ留学プログラム
・国際交流の活動報告

（写真：医学部祭（平成 21 年 10 月 9、10、11 日）でのタピオカジュース販売の様子

②企画

・伝統衣装を無料貸し出し、
　記念撮影してもらった。
　10 数名の試着と撮影があった。
・タピオカジュース販売を行い、2 日間で 500 個販売した。
・展示教室内に、テーブルとスライドショーを設け、留学での写真をもとに作成した 30 分間のムービーを流し、展示できなかった多くの写真を紹介。
　テーブルを設け、くつろぎながら見てもらうようにした。

２）経験の共有と幅広い交流

①運営および参加を行った。

・海外臨床研修を目指す学生・医師のためのセミナーを実施

（講演会、懇親会、セミナー）

-伴信太郎先生（2009 年 7 月 10、11 日）

名古屋大学医学部附属病院総合診療部・教授

日米医学医療交流財団・専務理事

日本医学教育学会・会長

-赤津晴子先生（2009 年 11 月 26 日）

スタンフォード大学内分泌内科

Clinical Associate Professor

（写真：赤津晴子先生との親睦会、2009 年 11 月 26 日）

・特別講演

-伊藤学先生（2009 年 11 月 19 日）

トロント大学小児科

・留学プログラムからの発展

-シュミット先生（2009 年 10 月 22 日）

ニューキャッスルアポインタイン大学医学部感染症科

・香川大学とブルネイ・ダルサラーム大学との学術交流協定締結（2009 年 11 月 8 日）

アダナン・ブンター氏（ブルネイ前駐日大使）に、本学初の名誉博士称号授与（2009 年 10 月 20 日）の際に、学生から「Forever Friendship」と題し、留学からの学びを報告（2009 年 10 月 21 日）

・冬季ブルネイ留学プログラムの運営と参加

2009 年 12 月 10 日から 24 日までの２週間にわたり、留学経験者が中心となって、ブルネイ学生のための歓迎プログラムの企画した。その過程で、彼らの医療システム、教育システム、宗教や文化の違いについて学んだ。多くの学生が海外の医学生と交流を持ち、留学しなくてもそれらを学ぶ良いきっかけであった。

②他学部の方との交流

本学での国際交流会（2009 年 12 月 10 日）に初めて参加し、全学部の留学生と交流を持てる貴重な機会であった。また、医学部での留学生との交流も行った（2009 年 12 月 22 日）。

３）大学への還元

200 名程度の医学部の全先生方のための Faculty Development 会議に、「香川大学におけるチュートリアル教育の向上に向けて～ブルネイダルサラーム大学から学ぶ～」と題し、学生 9 名が提言を唱えた（2009 年 10 月 15 日）。学生の発表後に先生方の活発な議論がなされた。

４）地域への還元

HP を作成し、様々な情報を発信した。また、香川国際交流会館（通称：アイパル香川）での交流企画の紹介も行った。

４．この事業が本学や地域社会等に与えた影響

１）本学に与えた影響

このプロジェクト事業を実施したことにより本学内での海外に興味のない人々などにも、外国の文化、システムについて知る楽しさとそこから得る学びを伝えられたと感じた。また、海外臨床研修を目指す学生・医師のためのセミナーの企画を成功させ、多くの学生を集めることができた。参加してくれた学生の中には、海外留学に興味はなくとも本学内で参加できる気軽さから参加し、先生方の経験談を聞き、感銘を受ける者もいた。また、異なる教育プログラムや医療制度に対して、意見交換なども行い、よりより教育プログラムや医療を目指すきっかけとなった。また、冬季ブルネイ留学プログラムの中で、病院実習を行い、医療について学習したり、クラブ活動に見学や参加することで、多くの学生と交流を持つと同時に日本文化について学んだりすることもできた。

（写真：冬季ブルネイでのうちわ作成の様子、2009 年 12 月 12 日）

（写真：幸町キャンパスで開かれた国際交流会 2009 年 12 月 10 日）

また、幸町キャンパスで開かれた国際交流会に参加することで、普段は地理的条件のために、接することの少ない学部の学生や留学生と交流が持てた。

その他に、医学教育の向上のための Faculty Development 会議に参加し、学生がブルネイ留学プログラムで学んだ、チュートリアル教育を伝えた。ブルネイダルサラームでは講義による勉強形式は少なく、ほぼチュートリアルによる勉強形式をとっており、その充実したシステムを、40 分間の発表の中で伝え、最後に学生自身が考えるチュートリアル教育の改善案を発表した。参加していただいた先生方から活発な意見交換が行われ、医学教育について全先生方で討論する機会となった。

（写真：Faculty　Development 会議での学生発表時の写真、2009 年 10 月 15 日）

２）地域社会に与えた影響

地域の人への関心も高めることができた。例えば、医学部祭での伝統衣装を着用し積極的に学内を歩くことで、視覚的に興味を引き付け、また来客者の方からの「その服はどこの国のですか？」などの会話も生まれ、交流へのきっかけとなった。またスライドショーや展示を通して、現地で楽しみ学ぶ姿を紹介することで、高校生に対し、香川大学に入る魅力も伝えられた。その他には独自の HP を作成し、生徒の視点による自由な発想と率直な意見や各々の体験から学んだことなどを紹介している。また、香川国際交流会館（通称：アイパル香川）にて、このような大学での国際交流活動を紹介も行った。それらを通じて、冬季ブルネイ留学プログラムのブルネイ学生を受け入れていただいたホームステイのご家族の数家族の方が、医学部で行われた国際交流会にも参加していただいた。

５．自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

自分達が留学を通じて味わった他を知る楽しさや学びを自分達のものだけで終わらすのではなく、大学にいる学生や先生、また地域の多くの人々に知ってもらうことができた。異文化を身近に感じ、例えばイスラム文化を学んでもらうことによって、また、日本と海外との医療システムの違いを知ることによって、他の国への関心も高まるきっかけになると思う。また、他の文化と自分の文化の違いや同じ部分を知ることで、当たり前だと思っていたことに意識が向き、自分の国や地域に目が向くようになり、新聞で見過ごしていたニュースにも興味がわき、他国への無関心が関心にかわると思われる。そして、そこで生じている問題を自分の身近なものとして捉えて考えることで、自国に活かすこともできると考える。外国を知ることで自らを見直すが、わざわざお金と労力をかけて海外に行か

ずとも、その機会を提供できた。その外国を知るということ、国際交流への第一歩が本プロジェクト事業から成されたと考える。

６．反省点・今後の抱負（計画）・感想等

反省点としましては、より学部を超えた国際交流は少なかったことが挙げられる。医療関係者ということで医学部内にとどまることが多かったと思う。また他の企画も多く、労力と時間の限界があり、その部分が薄くなってしまったのが残念である。またインフルエンザによる学生活動の中止期間が数カ月あったために、活動に障害が生じた部分もあった。

今後は、より積極的に学部間の交流を促進し、また地域に出て、紹介や交流をしていく予定である。

７．実施メンバー

代表者	鈴井　泉　（医学部４年）	
副代表者	下西　成人（医学部４年）	
構成員	川久保充祐（医学部６年）	西川　薫里（医学部６年）
	鈴木　裕美（医学部６年）	真島　充人（医学部６年）
	二宮　実穂（医学部５年）	横山　聖太（医学部５年）
	原　　彩子（医学部５年）	鏑木　直人（医学部５年）
	大西紗映子（医学部５年）	谷本　弘樹（医学部５年）
	天野　辰也（医学部４年）	石岡　千奈（医学部４年）
	新里　亜季（医学部４年）	細田　愛　（医学部４年）
	本波　理香（医学部４年）	利根安見子（医学部４年）
	脇谷　理沙（医学部４年）	村山　義明（医学部４年）
	白神　真乃（医学部３年）	宮崎　ゆか（医学部３年）
	野々山翔子（医学部２年）	郡司　朗子（医学部２年）
	小野　正大（医学部２年）	木立　薫　（医学部２年）
	森川真理乃（医学部１年）	山田　亮　（医学部１年）
	大庭　聖也（医学部１年）	永坂　託　（医学部１年）
	横井　麻理（医学部１年）	坂本あすか（医学部１年）